

土師器のうつわ、須恵器のうつわ

—奈良時代の食器構成に関する一考察—

森川 実（奈良文化財研究所）

I はじめに

平城宮は、奈良時代における最大の官衙であって、そこから出土する土器をさまざまに検討することは、あらゆる点で「官衙的な」土器群の様相をあきらかにすることにほかならない。しかし、幸運にも平城宮の土器に身近に触れることのできる立場からいえば、それらの土器群のどの部分が「官衙的」であるのか、時々わからなくなることがある。さまざまな検討を経てあきらかになりつつある平城宮の土器様相は、いわば「官衙的な」土器様相のお手本として、各地の官衙遺跡にも一般化できる部分があるかもしれないが、一方では平城宮に固有の特徴が強く表出しているはずである。そして、筆者に与えられた本研究会での課題は、完全無欠の官衙的土器群である平城宮の土器群を用い、そこで「官衙的な」指標を措置してしまえば、今後はそれがお手本となり、「地方の」官衙出土土器にも一般化できる……ということであったにちがいない。筆者の理解によれば、筆者がこの研究発表で求められていたのはまさにそうした報告であったと思う。

また、これまでの古代官衙・集落研究会では、2002年に「墨書土器」、2003年に「陶硯」を取りあげるなどし、いずれもが「官衙的」であることの指標と目されているのはあきらかだが、膨大な出土土器のなかで、ごく少数を占めるにすぎない墨書土器や陶硯が、その遺跡の性格を考える材料としてどれくらい有効であるかについて、一考の余地がないとはいえない。墨書土器や陶硯、それに畿内産土師器などの出土は、その遺跡が官衙遺跡である可能性を暗示するが、そのことはきっと十分条件ではないからである。そうすると、やはり出土遺物のなかで圧倒的多数を占めている土器から、その遺跡が官衙であるのかどうかを考える手がかりを得ようとするのは、ごく自然な方向性といえよう。このとき、その研究が土器の器種構

成論に向かうのは当然である。だが、筆者はそこでもうひと工夫が必要であるといつも思う。そのひと工夫が、筆者の場合は古器名研究との融合というかたちになる。

本稿はもともと、奈良時代の史料に見えている古器名と、考古学上の器種⁽¹⁾との対応関係を探るといって、いわゆる古器名考証の専論として企図していたものであったが、以下で強調したいのは、この方面での研究が、平城宮・京出土の土器群を理解するうえでも、重要な視点を提供するということである。この枠組のなかにあって、「官衙的」な土器様相というのは（それが実在するとしても）全体の一部ということになり、結局は都城の土器の一般的傾向をあきらかにするのが本論の目的のひとつとなる。

そこで本稿では、古器名に関する研究論文というよりは、奈良時代後半における器種構成と、「正倉院文書」に見えている器名構成とを突きあわせることで、今後の古器名研究の道標を築きたいと思う。もっとも、考古学上の器種と器名とを結びつけるためには「接着剤」となる研究の蓄積が必要で、それこそが筆者の考える古器名考証の研究ということになる。ただし、この方面での研究には大きな障碍があり、今のところ筆者はそれに着手できない⁽²⁾。この点はあらかじめ、今後の課題として一旦棚上げとするが、それが古器名研究の根幹をなすのはいうまでもない。

II 器種構成論と古器名の復元研究

器種構成論は考古学上の「器種」構成の差にもとづく議論であるが、古器名研究との融合には一定の制約がある。それは、考古学上の「器種」のそれぞれを、そのまま奈良時代の「器名」に対応させることができないこと、すなわち器種名を古器名へと戻すための方程式がいまだあきらかでないことである⁽³⁾。奈良時代の器名群と、それを統べている分類の体系

とが「正しい」答えであるとすれば、考古学の器種分類は仮の分類にすぎない⁽⁴⁾ わけで、後者のみで奈良時代の器種構成を論じることは、本当はできないのである。しかしながら、いくつもの古器名を記した同時代史料にめぐまれた平城宮とその周辺の土器研究にあっては、考古学上の器種が古器名といかなる対応関係にあるかをも含め、器種構成の原理にまつわる仮説の構築を試みるのは当然であり、またその成算も十分にあるはずである。そして、古器名にまつわる先行研究のいずれもが等閑視され、考古学用語としての器種だけを唯一の術語としつつ、平城宮の土器が語られ続けている状況は、それが誤りではないものの、考古学上の仮構に対する内省を欠いているという点で、一抹の不安を覚えるものである。

そこで考古学上の器種を数え上げてゆくという単純な計数法によっても大雑把にあきらかにできることは、例えば①食器と煮炊具、貯蔵具との大まかな数量比や、②食器のなかでの土師器と須恵器との比率ということになるが、さらに細かくして③土師器杯Aと杯B、杯C……などの構成比(もっと細かく、例えば土師器杯A Iの占めている割合でもよい)を調べるというのは、単にどれが多いか、少ないかを論じるだけならまだしも、さらに一步進めて何らかの解釈を導き出すには、何とも心もとない数字の数々ということになる。そうした数字が表しているものが一体何なのか、たぶん誰も知らない。そこで最善とはいえないものの、③に関しては考古学上の要請にしたがって細分化された器種の数々を、器名への対比に適したかたちへと、疑似的に整理統合する必要が生じてくると思われる。本稿は、そのための方法を定め、さらに洗練させることを目的としておらず、別に専論を用意しなければならないが、先行研究には器種名と古器名とを対応させた例がある。以下、研究史を簡潔にまとめたうえで、筆者の研究がいかなる位置を占めることになるかについて、少し考えておきたい。

Ⅲ これまでの古器名研究

古器名の研究というのは、畢竟古代の史料に見えているいくつもの器名が、遺跡から出土するさまざまな土器のなかのどれを指していたかを復元するのが目的である。当初は、『古事記』や『日本書紀』、それに『延喜式』などに見えている古器名をそのまま、出土土器の呼称として用いていたが、このような単純

な見通しはやがて行き詰まりを見せた。小林行雄・原口正三の両氏によれば、土器の称呼に記紀・万葉の古語をあてるという方針では古墳時代の須恵器にあてべき古語が足りず、結局は『延喜式』からの古語の借用や、擬古語・新造語・折衷語を創出することになったという(文献4)。「こうして、土器の名称を、古代におこなわれていた方法でよびたいという当初の方針は、いわば完全には守ることができなくなってしまった」のである(文献4-272頁)。

ところで小林らは、「平安時代の須恵器に対して、『延喜式』所載の名称を適用しようとする」と、そこには無慮数十種におよぶ器名が列挙されていて、にわかには結論が出せないようなので、ひとまず奈良時代の古器名研究に着手した。このときに用いたのは「正倉院文書」で、そのなかに登場する坏・碗・鉢形について若干の整理をおこない、それぞれの器名に対応するとみられる出土土器をあげている⁽⁵⁾。また藤澤一夫(文献22)は、土師器の有蓋碗を「鉢形」にあて、有蓋盤として現在の土師器杯Bを、高盤形土器には現在の高杯を例としてあげているし、これらに続く関根真隆(文献5)も平城宮や船橋遺跡出土土器のなかに、片碗や鉢形、それに高杯を見出している⁽⁶⁾。

この頃までの古器名考証は大同小異で、出土土器の器形に古器名を直接あてる手法は同じである(しかしこのような考定作業は、必ずしも網羅的ではなかった)し、ある器形がいかなる器名で呼ばれたかについても、あるイメージが共有されていた。例えば、奈良時代のうつわは深いほうから碗、坏、盤で整序させるという概念があり、そのなかの鉢形といえば、たいていは糸底(高台)を付した碗形態の容器を指すとされた。そして新しい古器名研究も、基本はこうした概念を継承しつつ、先行研究の延長線上に位置しているが、しかしより体系的で、かつ網羅的であることが目指された、といえる。どうしてこのような進展があったかといえば、それは考古学上の器種分類が精密化し、ことに杯A、杯B、杯C……などと、食器類の細分化がすすんだからである。こうした細分はもともと、考古学上の要請にもとづいたものであったが、そのことで古器名に対比されるべき器種名の選択肢が増えた、ということである。

古器名研究は素朴な段階を脱した。次の研究段階は西弘海の研究(文献20)にはじまり、現在にいたっている。西の古器名考証はとにかく体系的であったし、

何よりも彼が創出した新概念（パラダイム）といかに整合するかが念頭におかれていたようである。すなわち西は、①多様な器種分化と、②その前提となる法量の規格性、それに③土師器と須恵器との互換性や、④食器類における金属器志向という多重的な構造のなかに、さまざまな古器名の布置を定めようとしたのであった。そしてこの方向性において、彼の考定案は上記①～④に合致していることが求められた、とみてよい。論点が多岐にわたるので、詳しくは原著にあたっていただきたいが、ともかく西の整理によれば、古器名と器種名との対応関係は

片 碗：土師器杯A I-1・杯A II、須恵器杯A I-1・杯A II-1・杯C（天平末年）→土師器杯A I、須恵器杯A I（宝亀年間）

碗：土師器杯B I・須恵器杯B II（天平宝字～宝亀年間）

片 坏：土師器杯A I-2・杯Cなど、須恵器杯A I-2・杯A II-2など（天平末年）→土師器杯A II・杯C、須恵器杯A II・杯C（宝亀年間）

窪 坏：土師器碗A I・碗A II・碗Cなど（天平宝字～宝亀年間）

となる。こうした解釈への疑問がないわけではないが、西の仮説は法量変化に連動した土器の器名変化説であるとみてよかろう。ともかく西は、土師器と須恵器とで食器の器名、および器種構成が共通していて、両者の互換性が成立していたと考えていたようだ。

また巽淳一郎は、平城宮第一次大極殿院・東楼S B 7802柱抜取穴から出土した食器類の構成に関して検討をくわえている（文献6）。巽によれば、そこでは碗+片碗+片杯+塩杯+佐良、それに片碗+片杯+塩杯+佐良という2つの食器組み合わせを復元できるといふ。そして、前者は門部、後者は衛士らの食器セットであるとしている。

このほか、津野仁は器名墨書土器を用いて「地方における器種分化波及」を論じている（文献8）し、小栗明彦も器名墨書土器から「生産地」と「消費地」との間、ないしは宮中枢部と京城とで器名浸透の較差があったと主張している（文献3）。最近では荒井秀規が『延喜式』主計式などに見えている古器名の数々について詳しく解説しており（文献1・2）、大いに参考になる。

奈良時代の古器名研究は、主に「正倉院文書」と、平城宮・京出土土器との関係性において進められてきた。出土土器とその同時代史料とが平城宮に集まっている以上、このような流れが生まれるのは当然である。そうしたなか、平城宮という巨大官衙から出土する土器群の食器構成と、史料が語る食器の構成とがどの程度一致するかを確認する必要があるのではないか。本論の目的と意義をひとまずそのように定めたくて、次章では平城宮・京出土土器の土器群について、その食器構成をいくつかあげ、古器名研究の成果との対比に備えたいと思う。

IV 平城宮とその周辺の土器様相

ここまで記した研究のデザインにもとづき、奈良時代における平城宮とその周辺の土器様相を概観しておきたい。だが、筆者の意図は土器群の個別記載でも、細かい数字の比較検討でもない。そもそも数字の典拠が報告書の器種構成表である以上、そこから展開できる議論はもとより大雑把なものである。そして本論をすすめてゆくうえで必要な統計は、ただひとつの表に要約できる（表1）。

表1にあげてあるのは、平城宮・京の9つの土器群である。平城宮の土器編年にしたがって、古いほうから順に概要を記しておこう。

(1) 平城宮下層・S D 1900 A

平城宮の中央区下層で見つかった南北大溝で、宮造営以前の道西側溝にあたる。土器群は平城宮土器Iの基準資料である（文献13）。出土土器のうち、土師器は全体の52.3%で、須恵器とはほぼ等量である。このうち、食器類は土師器・須恵器あわせておよそ2/3（68.8%）を占めているが、食器のなかで土師器は4割にとどまり、須恵器のほうが多い。土師器の煮炊具は全体のなかの24.0%、そして須恵器の貯蔵具は6.6%にあたる。平城宮S K 820、S K 219、S K 2113の土器群と比べると、S D 1900 Aのほうでは煮炊具の割合が高く、食器類との数的バランスは偏りが少ない。その報告は、S D 1900 Aの土器群は宮造営以前の村落に関係したものか、あるいは平城宮の造営工事に従事した「役民」らが用いたものか、としており、いずれにしても官衙の土器群ではない。